

魚眼レンズ

生の中に置いてもいい。生活が多様化しているから、いろんな使い方があると思う」

「現代はとてもファッションブルな時代だ。陶器といっても、過去の色、形をそのまま受け継ぐだけでは物足りない。自由に発想して色をつくり、形をつくって、陶芸を幅広くとらえたほうが面白い」



大嶺實清さん

新しさと古さの間を揺

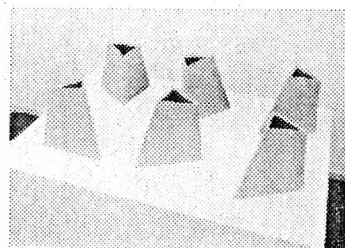
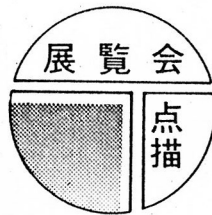
れ動きながら、独自の陶の世界を探る大嶺實清さんが画廊・匠で個展を開いている。現代風にアレンジされたストライプの模様や思い切りのいい造形の世界が広がる。中には機能を全くなくしてしまったようなオブジェも数点。

「こういうのがブティックの中に一つくらいあってもいいじゃない。芝

すべては実験ですよ…

「ウーンと考え込んでみると、足元をすくわれそうになる。温かみのあるクリーム色と土味。だからカーブする面や三角すいを途中から切ったような形。本人は遊び心おう盛。」「日ごろは忙しくて好きなことができない。こういった画廊空間を使って、時折遊ぶことは、作家として大事なことでと思う」

「おもしろい土を見つけたと、すぐにその土を使ってみたくなる。」「人間の信念、自信ほどあてにならないものはないと思う。すべては実験だ。これからも毎回違うことをやってみたい」。ジャンルにとられないトータルな美を考えながら、さらに模索が続きそう。



「陶」・大嶺實清展（28日～11月16日、画廊匠） 現代にマッチした新しい陶芸の世界を構築する大嶺さんの個展。今回はロクロ成形ではなく、手びねりの作品ばかり。土味あふれるストライプの入った作品や、クリーム色のセラ肌の器、オブジェも加え十七点を展示し写真。

機能的側面を後退させ、造形美を追求。新しさと古さの間で振幅し続ける大嶺さんは「焼き物は台所で使用する雑器からオブジェまで幅広い方がいい」と強調していた。